

| | | | |
|----|--------------------------|------|----------|
| 所属 | 言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程 | 修了年度 | 平成 24 年度 |
| 氏名 | QUAN THI NGUYET THO | 指導教員 | 池田広子 |

| | |
|------|--|
| 論文題目 | 在日ベトナム人子弟におけるバイリンガル教育について —家庭における学習言語支援策の構築を目指して— |
|------|--|

本文概要

1. 研究目的と背景

本論文は東京周辺に定住しているベトナム人家庭を対象とし、家庭でどのような言語教育を行っているのか、また、母語の保持にどのように努めているのかについて明らかにすることを目的とした。

学校に通う外国籍の子どもは日本語の必要性を感じ、学びたいという要求を持っているという報告がある。また、就学前の幼児の母語を習得する過程で日常会話はできるが、読み書きはまだ発達しておらず、母語も第二言語の日本語も十分に発達しない可能性も指摘されている。このような言語少数派の子どもの親たちは、二言語育成についてどのような考えで取り組んでいるのだろうか、親の意識や考え方は、子どもの言語習得や適応にどのように反映しているのだろうか。このような問題意識から在日ベトナム人の子どもと両親の意識の関係を追究した。

2. 研究方法

調査対象は、東京周辺に定住するベトナム人の4家庭（17名）である。2012年6～8月にかけて家庭教育と日本語教育との関連を調査するために、協力者の承諾を得た上で、半構造化インタビューを実施し、ICレコーダーで録音した。データは、①ベトナム母語話者の親に行ったインタビューを全て文字化した資料、②各家庭に入り込んで観察した時のフィールドノートである。分析方法は、二言語共有説 (Cummins 1984)、カウンターバランス説 (Landry&Allard 1991) に基づき以下3つの観点から分析した。
 (1) 在日ベトナム人の家庭において、子ども・親はどのように第一言語と第二言語を使用しているのか、
 (2) バイリンガル教育に関する親の意識はどうか、
 (3) 上記(1)(2)の結果を照合し、両者が関係する点を示し、4家庭の特徴を検討する。

3. 分析結果と考察

第一に、在日ベトナム人の子どもは、ベトナム語の「聞く」技能だけが発達していることが分かった。母語が話せるにもかかわらず、子ども自身が積極的に発話することはなく、むしろモノリンガルのように日本語の「話す」力だけが高まっていた。一方、子どもの母語・母文化に対する意識は、ベトナムに帰国する機会とその期間に強く影響されていることを示唆した。第二に、在日ベトナム人の家庭におけるバイリンガル教育については、親の日本語運用能力が高いほど、子どもの母語喪失の可能性も高くなる。アディティブ・バイリンガルよりサブトラクティブ・バイリンガルになる傾向が強いことが窺えた。第三に、ほとんどの家庭では、言語の使い分け意識が徹底されていなかった。また、バイリンガル教育に対しては肯定的意見と否定的な意見の両方が確認され、親の意識によって、子どもの母語への関心や興味が異なることも確認された。以上の結果から、ベトナム家庭のバイリンガル教育において以下2点を問題として指摘した。(1) 親が具体的な計画を立てなければ、バイリンガル教育は効果が望めないということ。(2) 子どもの母語運用においてが4技能のバランスが取れていない点である。

4. 今後の課題

本研究は少数のベトナム家庭を対象にフィールド・ワークとインタビュー調査によって質的に追求したものである。そのため、ここでの結果を一般化するには至らない。しかし、在日ベトナム人子弟と親の意識の特徴は得られた。さらに範囲を拡大して調査を展開していくことが今後の課題である。

